

<p>団体名</p>	<p>特定非営利活動法人「飛んでけ！車いす」の会</p>	<p>所在地</p>	<p>札幌市</p>
<p>団体概要</p>	<p>1998年に設立した、国内外の障害者の自立支援とボランティア活動の促進を目的とした法人である。日本で使われなくなった車いすを集め、修理・整備し海外旅行者に託して開発途上国などにおいて必要としている人に届ける。現在までに81カ国、約3100台を届けている。</p> <p>法人にコーディネーターを置き、車いすを希望する方の身体のサイズ・特徴、使用目的を確認し、約100台の点検済みの在庫から合うものを用意している。</p> <p>車いすの寄付は、公式サイトのほか、病院や養護学校などに直接呼び掛けている。贈る人の思い、贈られた人の感謝の声を公式サイトで公開している。</p> <p>2021年8月現在正会員112名、賛助会員203名。</p>		

「車いすの学校」を活用した“三方よし！”の社会的弱者支援

<p>背景</p>	<p>寄付された車いすの整備は、リタイアした機械屋さんなどボランティアの「匠」が担っているが、平均年齢73歳と高齢化していて、次の世代を育てる必要がある。</p> <p>また、地域に居場所を持たずにいる社会的弱者は多く、社会問題となっている。</p> <p>社会的弱者とは障害者のほか、うつ、引きこもり等々生きづらさを抱えている人を指す。現在引きこもりは全国に100万人はいると言われ、8050問題も深刻である。その人たちの、家でも職場でもない第3の居場所づくり、地域包括的なくみづくりが重要であり、車いすの整備を学ぶ場に参加してもらうことが、後継者の育成とともに居場所づくりにもなると考えた。</p>
<p>活動内容</p>	<p>2019年から車いすの整備を教える「車いすの学校」を実施してきた。約3カ月の間に5回の授業に参加し、基礎的な整備方法を習得できるカリキュラムとなっている。修了後は整備ボランティアへの参加登録を促し、継続的に活動に参加してもらえるよう工夫している。その結果、本人の居場所づくり、やりがいに結び付いている。</p> <p>「車いすの学校」には、“保健室”や“PTA”の機能を持たせ、専門職による健康よろず相談や、家族が集う場の提供も行っている。周知活動としては、障がい者就労支援事業所や引きこもり支援を行う団体等への訪問も行っている。</p> <p>事業名にある「三方よし」の三方とは「当法人」「参加者」「地域」を指す。社会的弱者を含め、さまざまな人が「ごちゃまぜ」で参加し、匠から技術を教わる。その過程で、何かをつかむきっかけとなり居場所を得られれば、誰にとっても益がある。</p> <p>本事業では、法人の拠点がある札幌市以外での「車いすの学校」の展開にも取り組んでおり、余市町や京極町の実施を目指して調整を続けている。</p>

活動を実施する中での気づき・発見（成果・効果）

同事業は世界規模のリサイクル活動であると誇りに思っている。SDGs の 17 のコンセプトに当てはまる。2020 年は 5 人が「車いすの学校」を修了し、4 人が整備ボランティアとして活動している。少しずつではあるが、整備の後継者が育っている。

京極町での活動を通し、地方にも小規模多機能な地域資源があることに気づかされた。

課題、今後取り組もうとしていること（展望）

当法人の事業を持続的に展開するためには整備技術の伝承が不可欠である。「車いすの学校」の参加者の募集についても、目に止まるような PR をしていきたい。

札幌市では年間 500 台もの車いすが大型ごみとして捨てられている。捨てられている車いすの、使えるものを引き取るしくみを作りたく、市に働き掛けている。

休眠預金の助成金が終わっても持続性のある事業にしていきたいためにも、収益事業をもち自立することが不可欠である。また、企業の CSR 活動にからみ、協力を得たいと考えている。車いす団体や介護保険などにも働き掛け、関連業界と横のつながりをもちたい。

また、地方にすでにあるサービスなど小規模多機能な地域資源を活用し、その土地ならではの社会的弱者を含む「ごちゃまぜミックス」の活動、居場所づくりのモデルとすることがこの事業のゴールと考えている。今後も他地域で実施する。



事務所には寄付された車いすがずらりと並ぶ



「車いすの学校」は、扱うところから教えてくれる

活動内容に関する問い合わせ先

特定非営利活動法人「飛んでけ！車いす」の会 副代表理事 照井レナ
電話：011-215-8824 メール：tondeke@bz01.plala.or.jp